研究雑話(50)
人間発達の物質的基礎(十四):コトバと叙述(1)、関係の叙述(範列関係・パラディグマ)

藤井力夫

前回は、「知覚と行為」についての話を終えるにあたって、人間だけがもつ機能=文字の世界への移行をめぐってお話しました。具体的には、五歳児のだれもが直面する「鏡配置」、この克服にあたっての問題でした。ものの使い方・あり方からそのものの特徴・概念の形成。これへの移行には、上下、左右といった比較だけでなく、対角線的な点対称の関係への比較。これ如何が重要。とても大事な問題です。こうした観点で子どものしぐさを捉え直すと新しい発見があるかと思います。なにかの参考にして下さい。

今回からは「コトバと叙述」ということでお話したいと思います。脳神経系がなせるわざですから、問題の設定としては「聞くことと話すこと」、これが基本です。が、これだけではことばの獲得の必然性を説明することができません。①どのようにことばの諸関係を整理し、②予備庫から引き出せるようになるのか。これが問題です。言語学では前者を「生成」、後者を「変換」と言います。「聞き・話す」なかで、脳神経系がどのように「生成・変換」できるようになっていくのか。これが説明されなくてはなりません。まずは、ことばのもつ諸関係がどのように整理されるのか、パラディグマ関係についてお話したいと思います。「範列関係」と訳されますが、「類似的・対比的関係」といった方が理解しやすいでしょう。他に、シンタグマ関係(統辞論)、音韻論(ことばのリズム)といった角度からお話する予定です。

図Aを見ていただきたい。言語学でいうパラディグマ関係を例示しました。語形変化、反対語、類義語、比較、概念等といったことばに内在する潜在的な諸関係のことです。発話である語を引き出すとき、いつも他の語を呼び起こしながらそれとの連関のもとで話したり、聞き分けたりしています。ことばは単独では存在しないのです。A・R・ルリアは、この対比は脳の後方部での働き、受容と加工の産物としてなされると考えます。

図Bは、頭頂ー後頭領病変の患者。知覚と行為でのコースのブロック課業の困難事例と同じ脳の後方部第三次ゾーンの損傷。患者は、脳の前方部は損傷されていないので、「犬が吠えている」等の統辞的な叙述は可。また「家の下には土台がある」など具体的にイメージできるものも可。ところが、抽象的なことばでの関係、「三角形は円の下にある」、「父の弟、弟の父」といった関係は困難。算術操作も、「二たす三は五」は可、「四たす七は十一」といった繰り上がりは困難。

図C。再教育プログラム。支えの入れ方。知覚と行為のときの外的支えと基本的には同じ。二つに分けるということ。「シャンデリヤはテーブルの上にある」。「テーブルはシャンデリヤの下にある」。場面を上下二つに分けることへの気づき。定位する能力は損傷されていないので、これへの気づきを支えに、それがどちらにあるか、主語を表現すれば引き出せるようになっていきます。

(北海道教育大学教授)

A.パラディグマ関係

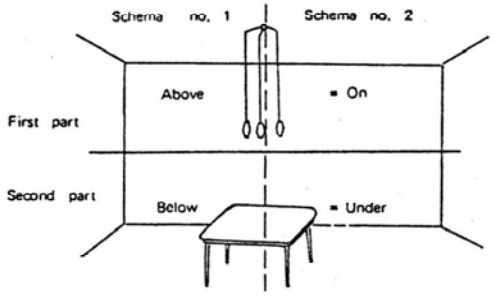
he	-	his	-	him	格変化
am	-	are	-	is	
good	,	fair	,	right	類義語
good	,			bad	反対語
parents	=	father	+	mother	概念
young	,	younger,		youngest	比較

B.患者、Z.(左頭頂ー後頭領病変)

23歳、男、機械学研究所研究生。1942年第2次世界大戦中、左頭頂ー後頭領に弾丸損傷。

内容の叙述:	犬が走っている。	可
関係の叙述:	家の土台。一切れのパン。	可
	父の弟。弟の父。	不可
	三角形は円の下にある。	不可

C.再教育プログラム(A.R.LURIA)



① 絵を上と下の二つに分けなさい。
② 「上」、「下」、指さして、読みなさい。
③ 「上」にある物は何ですか。
④ シャンデリヤは上、下どちらにありますか。
⑤ 「…の上に」を使って文を作りなさい。
⑥ 「…の下に」を使って文を作りなさい。
⑦ 「下」にある物は何ですか。
⑧ テーブルは上、下どちらにありますか。
⑨ 「…の下に」を使って文を作りなさい。
⑩ 「…の上に」を使って文を作りなさい。